

調査・観察会

以下により多摩虫調査・観察会を行います。
今年はキベリタテハが豊作なようです。他にツマジロウラジャノメ他が期待できます。
ふるってご参加ください。

日時 2010年8月28日(土)
場所 一之瀬高原
集合 R411(青梅街道)の柳沢峠 AM 9:00

車の場合は中央高速勝沼インターで降りて塩山・裂石経由柳沢峠
電車の場合は立川駅 6:43 → 塩山駅 8:13
または 八王子駅 6:42 → 塩山駅 7:50
駅に会員の車が待機しています。

当日自由参加ですが、電車で来られる会員は麻生(携帯 090-6016-0975)へ8月27日までに連絡してください。また、ML会員以外は葉書にて麻生までご連絡ください。

- * メアド変更
窪田敬士 takukubota@nifty.com
- * 来1月例会は1/18(火)となります。

◆生き物イキイキ漫画展
21~30日の午前10時半~午後7時(30日は午後3時まで)、コニカミノルタプラザ(新宿区新宿3)ギャラリーB&Cで。やなせたかしさんやモンキー・パンチさんなど、日本漫画家協会に所属する漫画家ら50人が「生物多様性」をテーマに描いた作品=写真はちばてつやさんの作品=100点を展示。会場でアンケートに答えると、記念図録のプレゼント(連日先着30人)。入場無料。03・3225・5001。2010.7.16読売



テントウムシが飛び立つ。翅を「わつて」といっているが、その瞬間を描くのにこれ以上の確かな言葉はないだろう。つややかな朱と黒の漆で塗り分けた小半球。その半球が真ん中の割れ目ではりつと割れる。それがテントウムシの飛び立ち方。

四季 長谷川 權



テントウムシ 読売

2010. 7. 10

高野素十

はむわつててんたう虫の飛びいづる

1978年、オックスフォード大学の若き研究者、N・B・デイヴィスは大学にほど近い、ワイタムの森でジャノメチヨウの研究をしていた。ワイタムの森というのは、イギリスの鳥類学の父とも呼ばれる、D・ラックがシジュウカラの研究をした、いわば聖地だ。デイヴィスもまた偉大な足跡を残そうとしていた。

彼が研究したジャノメチヨウは日本にはいない種だが、オスは草地の所々にパッチ状にできている日だまりを好み、縄張りとする。そこにはメスがよくやって来るのだ。

日だまりを占拠できないオスたちは木の上の方にいる。しかし、虎視眈々とチャンスをつかかっていることはもちろんで、ときどき日だまりに降りて来る。そこにオスがいないければ、我が縄張りとすることができるのだ。

しかし、我が縄張りの所有者がいて、この侵入者に対しスクランブルをかける。両者は互いにらせんを描きながら上昇していき、必ず侵入者の方が退散する。追いかけてくは3〜4秒間しか続かない。

侵入者はもつと粘ってみれば縄張りを得られるのではないかと思うが、必ず侵入者の

竹内久美子 動物行動学研究者

2010.7.27読心(9)

方が退散し、所有者が勝つ。そういうルールがあるのだ。

実はこのルールがあり、皆が従うというところがポイントだ。これこそが皆が従えば、誰もが損をせず、うまくやっていける唯一の道だから。

長々と追いかけてくをしていいることはお互いにエネルギーのムダだし、そうこうするうちに鳥などの捕食者にやられてしまいかもしれない。争いを長びかせることは誰にとってもよくないことだ。

そこで、こんな状況をつくってみたらどうなるかとデイヴィスは、ちょっと意地悪な実験をした。

日だまりに縄張りを構えているオスをAとし、その上の木の方にいるオスをBとする。

Aを捕虫網で取り除くと、数分もすればBが降りてきて日だまりを占拠する。

そしてBが10秒間日だまりに居ることを確認したら、Aを縄張りに放つてやる。どうなったと思いますか？

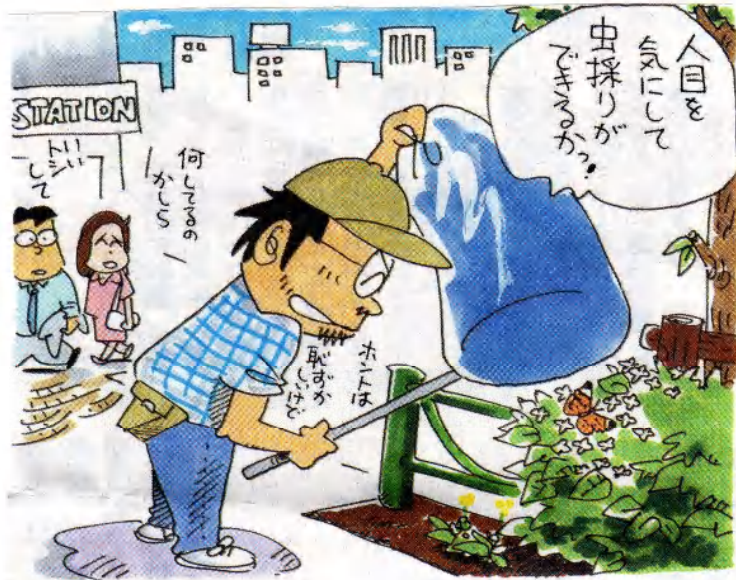
元々はAが縄張りの所有者なのだから、Bは退散する。いやいや、どちらも自分こそが所有者だと譲らず、延々と争いを続ける。

答えは……Aが退散する。しかもこんな理不尽な話にも拘わらず、3〜4秒間という通常バージョンの争いの後に退散するのだ。

Bが日だまりにいたのは、たった10秒間だった。こんな短い時間のうちにもBは縄張りの所有者と自覚し、AもAで彼を所有者と認めることができる。

恐るべきルールの厳守だ！人間にもし、縄張りの所有者が勝ち、侵入者は素直に退散するというルールがあったなら、世界は平和になるか？

縄張り侵入 素直に敗退



山手線29駅 虫探し

やくみつるさん

2010.6.17 読売

「東京のど真ん中でも虫は見つかります」。虫好きで知られる漫画家のやくみつるさん＝写真＝が5月下旬、東京都心を環状に走る山手線の全29駅を巡る「虫探し」の旅に出た。午前5時から日暮れまで、ひたすら虫を探す2日間。その様子は「東京の虫たち」のコーナーで報告される。

東京・世田谷で生まれ育ったやくさん。珍しい虫を集めるといふより、散歩中や自宅仕事場の網戸で、虫との予期せぬ出会いを楽しむのがやくさん流だ。かばんには、柄が伸縮する愛用の捕虫網。「虫を探して歩いていると、向こうから目に飛び込むように見えてきますよ」。白っぽい建物の壁や、夜間照明があるショーウイ

ンドー、幼虫の食べ跡がある葉が狙い目だそうだ。



駅の近くには、ゾウムシやカメムシ、ホタルガなど。街路樹にアリマキが多いためか、テントウムシの幼虫は各地で見つかる。一方で、美しく花が咲いているのに虫が見つからない植え込みも。やくさんは「手入れが楽なように、虫がこない植物を植えていますね」と寂しそうだ。

意外な出会いもあった。渋谷駅から線路沿いを歩くと、ミカンの木の周りで舞うナガサキアゲハの姿。「温暖化で北上したといわれています」とやくさん。

大都会でも、虫たちは、けなげにしたたかに生き延びているのだ。



* イラストはやくみつるさん



ウエノヒラタカゲロウ

【体長】約14ミリ

【国内の分布】北海道・本州・四国・九州

目で獲物を見つけ、すばやく捕まえる昆虫は、だいたい目が大きく、視力もよい。

たとえばトンボ

ぼくドラえもん

は、かなりのスピードで飛びながら、小さい虫を見つければ、空中で正確に捕まえる。このため、頭がほとんど目に覆われているほど目が大きい。このカゲロウも巨大な目を持っているが、カゲロウは成虫になると食事はしない。つまり、獲物を捕るための目ではないわけ



2010.7.22 読売(4)

短い命のたとえにも使われるカゲロウ。このオスの目は、メスを少しでも早く見つけて子孫を残すために発達したものであるだろう。

カゲロウは、羽を最初に身につけた原始的な昆虫である。そのためか、不完全変態のうちでも「半変態」という変わった変態をする。成虫に羽化するとき、最初は羽が分厚い不完全な「亜成虫」になり、もう一度脱皮しないと完全な成虫にならない。

今の日本にも、大人になかなかならない亜成人が増えた。成人への脱皮がうまくいかない。人間の一種の退化現象なのか。

(昆虫写真家・伊藤年一)